【別世界】アナザーワールド

TINORI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【別世界】アナザーワールド

【Ｎコード】
Ｎ８５１８Ｚ

【作者名】
ＴＩＮＯＲＩ

【あらすじ】
朝日が俺の目に差し掛かる。
俺は眩しさにより目を覚ます。
そこは、知らない家だった。
「気が付いたんですね」
女の子が俺に話しかける。
「ここは？」
俺は辺りを見渡す。普通の木製の家のように思える。
「私の家です」

「ところで、何故貴方は学校の校庭の真ん中で倒れていたのですか？」
「え！？」
俺は驚いた。
俺はさっきまであの商店街にいたのだ。
それなのに校庭の真ん中で倒れていたのかが自分でも解らなかった。
俺はもう一度今日の放課後のことを思い出す。

人生の分岐点（前書き）

以前もこのサイトで小説を書いてましたが、過去の作品をすべて消しての新スタートを切りました。
どうぞ、楽しんで読んでください。

人生の分岐点

人生には分岐点が存在する。この街にいた俺も分岐点に出会った。
此処は、きっと貴方もよく知っているであろう街、カップルやら主婦等が楽しそうに日々を送る街だ。
そんな街に俺、柏木俊介（かしわぎしゅんすけ）は住んでいる。
俺のことを簡単に紹介するとすれば、高校生になる前に両親が他界してしまったので、
祖父に引き取られて、高校の寮に住んでいるだけの変哲もなにもない残念な高校生だ。
「しゅん。さっさと行こうぜ！俺、店で並ぶのは嫌だからな」
突如俺に一人の男子生徒が話しかけてきた。
その男子生徒の名は天ヶ瀬達也（あまがせたつや）。
俺の同級生で学校の寮の隣の部屋だ。
「はいはい。今行きますよ。」
そういって俺は達也と一緒にある場所を目指す。
只今俺は達也が学校帰りに一緒に寄りたい店があるとかでそれに付き合っている。
もちろん。達也が連れて行く店の場所を俺は知らない。
「それにしても、１１月の終わりにもなれば寒くなるな」
俺はそういって左手の腕時計を見た。現在時刻は１６時４８分。
何故携帯電話があるのに腕時計を見るのか最初は皆疑問に思っていたけど、理由は簡単。
俺の死んだ親父の形見だからだ。
死んで半年と少し経った今でも両親のことは覚えてる・・・・・むしろ仮に半年程で忘れていたらそれは人としてどうなんだ？
そんなことを考える俺の横で達也が「何行ってんだよ」と馬鹿にした風に言う。
それから暫く歩いて不意に達也が立ち止まる。

「着いたぜ、しゅん」
俺は達也の指差すほうを見る。
ぼろっちい占い屋だった。
「・・・・・・・」
俺は暫く開いた口が戻らなかった。
「よかった～。まだ人が並んでなくて」
「おい、た・つ・や・君？」
（何だよ～。俺はさっさと占って欲しいんだから話かけんなよ～）
みたいな目をこちらに向けてくる達也。
俺は少々イラっと来たが、落ち付いて達也に話す。
「お前、何が「俺、店で並ぶのは嫌だからな～」だよ！こんな廃れた占い屋にお前みたいな奴以外に誰が並ぶのかを俺に教えてくれよ！！」
俺が達也に文句を言った瞬間。
「廃れた店で悪かったわね！」
ガン！と気持ちのいい音が俺の頭の上で鳴った。
「いってええええぇぇぇぇ！！！」
俺は痛む頭を擦りながら俺の頭に拳を叩き込んできた女性に叫ぶ。
「いきなり初対面の人の頭を殴る奴がいるのかよ！」
俺がそう叫ぶと、
「ハイハ～イ♪こっこにいまぁ～す♪」
などとふざけた調子で答える女性が一人。
俺は自分の顔が怒りで引きつっているのが解った。
しかし、この占い師の女性、よく見ると。
「・・・・エロい・・」
そう、エロいのだ！！
胸なんか爆乳だし、腰もキュッと引き締まってて、尻もデカイし、
完璧なプロモーションを持つ二十歳前後のおそらく性格が残念そうな（俺の主観で）占い師がいる。
一人で勝手に物々喋る俺のことをほったらかしにして達也が占い師

に話しかける。
「すいません。俺たちのことを占ってください」
ニコニコ笑顔で話しかける達也に対して。
「嫌です♪」
こちらもニコニコ笑顔で却下したあああああ！！
「私、災難が起きそうな人しか占わないんです♪」
・・・・何故だろう、彼女の語尾の「♪」が激しくムカついている俺がいる。
エロい体を持ち、語尾がやけに、おそらく俺だけがムカついてるのであろう占い師に占って貰う為に粘り続ける達也。
すると、急に占い師が俺の方を向いて一言。
「貴方、もうすぐ死ぬわね」
「「・・・・・・え？」」
これには俺も達也もびっくりした。
仮にこの言葉を俺に言うとしてもこんな感じの筈だと俺は思っていた。
例えば「えっとぉ、貴方、もうすぐ死ぬわよ♪」みたいな感じだと思っていたら、
急に真面目に喋りだしたのだ。
「あの～もう少し詳しく聞かせてくれませんか？」
俺の発言に対して占い師は頷いて話す。
「貴方は今から一時間後にトラックに跳ねられて死ぬのよ」
俺は腕時計に視線を落とす。
現在時刻は１７時２３分。
つまり、俺は今日の１８時２３分頃にトラックに跳ねられて死ぬらしい。
「おいおい・・・そんなの信じられるかよ・・・」
顔がさっきのような怒りではなく恐怖によって引きつる。
「・・残念だけどこれは事実よ。・・・受け止めなさい」
俺は無意識に後ずさる。

次の瞬間、俺は急にパニくって（はっきりとは覚えてないが恐らく怯えていたんだと思う）占い師と達也の目の前から全力ダッシュで消えうせた。

「ハァ・・ハァ・・・ハァ・・」
俺は走って占い師と達也のいるところから逃げた。
今は自販機に手を突いて休んでいる。
半年前に両親を亡くした俺は無意識のうちに「死」というものが恐ろしく怖いものに変わっていた。
現在時刻は１８時００分。
商店街に音楽が流れた。
俺は堪らなく怖かった。
死ぬのが怖くて仕方がなかった。
あの占い師の前にいたら今すぐにでも死にそうな感じがした。
そういえば、達也を置いてきたまんまだったな。
もう少し落ち着いたらメールでもして謝ろう。
そう思っていた俺の携帯に電話が掛かってきた。
「・・・もしもし」
俺は電話に出た。知らない番号だったが出てみることにしたんだ。
『あっ俊介！俺！竜（りゅう）。宮崎竜（みやざきりゅう）だよ』
「竜・・・か」
竜とは俺の従兄弟である。
正直最後にあったのがいつかも覚えてないので、顔も声も覚えてなかったので解らなかった。
「どうしたんだよ、急に」
『いや、実はさ・・・』
？どうにもおかしい俺の記憶じゃあ竜はハッキリと物を言うタイプの人間だ。
歯切れの悪いのが俺には不思議に思えた。

『お前さ、昔、爺様が俺たちに話した「魔法の世界」の話を覚えてるか？』
「魔法の世界」の話？確かにそんなことを話されたのは何となくだが覚えている。
「確か、戦争中に飛行機で飛んでたら「魔法の世界」に少しだけ行ったとかそんな話だっけ？」
『ああ。俺、実ザザさ、そのザザザとにザザいてザザ様らザ絡が・・・』
急に電波が悪くなったのか？ノイズが混じりだした。
「おい！竜！何かあったのか？」
俺は電話に向かって叫ぶ。
『女の子には気をつけろ・・ガチャ』
ツーツーと機械音が電話から聞こえる。
「女の子に気をつけろ？」
もしかして、占い師のことなのか？
でも、何で竜がそんな事を？
「キャー！！」
突然悲鳴が聞こえた。
俺は声のしたほうに振り返る。
すると、そこにはある光景があった。
母親らしき人物が娘を抱っこしていたときにこけたのだろう。
それだけならよかった。
しかし、事はもっと悪い方向に進んでいた。
抱かれていた娘が道路にまで転がっている。
「どんなこけかたしたらあんなんになるんだよ！」
俺は叫びながら女の子を助けようと道路に飛び出す。
その時、クラクションが鳴った。それも、トラックの。
俺はトラックのほうを見た。そして、その奥に見える商店街の時計も見えた。
時計の時刻は１８時２３分。

そのとき、占い師の言葉が俺の脳裏を駆け巡る。
『貴方は今から一時間後にトラックに跳ねられて死ぬのよ』
そして、竜の言っていた事。
『女の子に気をつけろ』
俺は女の子を占い師だと思っていた。
けど、違った。
次の瞬間俺の目の前は真っ暗になった

人生の分岐点（後書き）

今回はあらすじの回想ですのであまりファンタジーはありませんし、
今後も王道展開になりますｗｗ
それでもいいなら続きを読んでくれることを祈っています

新世界（前書き）

ここからはあらすじの後の話になります。

新世界

俺、柏木俊介（かしわぎしゅんすけ）は確かに今日の放課後は天ヶ瀬達也（あまがせたつや）と一緒に俺が一時間後に死ぬと言ってきた占い師の所に行って怖くなり占い師と達也の所から逃げた。
その後は街の商店街の大道理の向かいにある自販機で休憩してたら昔会った従兄弟の宮崎竜（みやざきりゅう）から電話が掛かってきた。
その後は悲鳴が聞こえて俺が振り返ったら女の子が道路にいた。
それで俺は道路に出た瞬間にトラックに轢かれたはずだ。
それなのに現在、俺は見知らぬ少女の家のベッドで寝いた。
しかも、その少女が言うには俺は学校の校庭で倒れていたらしい。
「確か・・・竜は」
俺は最後に話していた竜との電話の内容を思い出す。
「爺さんの行った「魔法の世界」の事と女の子に気をつけろって・・・」
その言葉の意味の『女の子に気をつけろ』は解った。
でも、爺さんの「魔法の世界」がどうしても理解できなかった。
「いや、そんなことよりもさっさと寮に帰って達也に謝ろう」
俺は上半身だけを起こしていた体を動かしてベッドから立ち上がろうとした。
「！？・・・何だ？」
おかしい。さっきまで動けそうだったのにいざ、立ち上がろうとすれば急に体に力が入らなくなったのだ。
ガクッと足の力が抜けて俺は床に倒れこんだ。
「大丈夫ですか！？」
多分、俺の看病をしてくれているのであろう少女が俺を立ち上がらせてくれた。
そして、俺を静かにベッドに寝かせる。
「まだ動いてはダメなんですよ。姉さんの治癒魔法で完全に治って

ないんですから」
その少女の発言に俺は何らかの違和感を感じた。
しかし、少女はそんな俺のことは気にもせず話を続ける。
「びっくりしたんですよ。放課後の校庭に先生が集まっていたんですから」
どうやら俺が倒れていたときのことを話しているようだ。
「それなら何故、先生ではなく君の家で俺は休んでいたんだ？」
そう、俺はここでも疑問に思った。
おそらく俺は彼女の学校の校庭で倒れていたのだろう。（何故校庭で倒れていたのは置いといてだ）
しかし、此処で疑問が生まれる。
何故教師ではなく生徒が俺の看病をしているのかだ。
でも、大よその想像は付く。
彼女が生徒なのは殆ど間違いないだろう。
黒髪のショートヘアーで身長は俺の肩ほどのところに頭があったので女子の平均ぐらいだろう。
歳も多分同じだと俺は予想する。
なので、彼女ではなく彼女の話に出てきた姉が教師か何かなのだろうと俺は予想する。
と、そこでドアが開いて女性が入ってくる。
「お、気が付いたみたいだね」
俺の看病をしてくれた少女に似ている女性が入って早々に俺に話しかける。
黒髪は腰のところまで伸び、黄色いシャツのようなものを着ており、ジーンズに似ているズボンを履き、白いエプロンをしている。
俺には女性の着ている服が俺の知っている服に似ているのは間違いないのだが、何処か違う気がする。
俺の視線に気づいたのか、女性は俺に質問をする。
「さってと、教師として不法侵入者の君に質問したいけど・・・喋れる？」

俺は此処でどんな返答をすれば最良の選択かを考える。
しかし、仮に今答えなくてもいつかは答えなければならない。
だったらさっさと答えてしまおうと俺は決めた。
「大丈夫です。喋れます」
女性は俺の言葉を聞くと笑った。
「良かった～。私の見込みじゃあ後半日は喋れないと思ってたけど。
いやいや君の回復力はずいぶん高いんだね」
女性は俺がまだ喋れないと思って質問しても言いかと尋ねてきたのだ。だったら、後半日待てよ！
俺は心の中で女性にツッコミをいれる。
「じゃあ、質問。」
そこで女性は言葉を区切り、いよいよ『質問』・・・というより寧ろ俺にとっては『尋問』が始まる。
「あ！そうそう。言い忘れてたけど、このじんもゴフッ！ゴフッ！んん！ごめんなさいね。最近風邪気味なのよ、勘弁してね。」
今この人『質問』じゃなくて『尋問』って言ったぞおい！！
どうやら女性はこの『質問』という名の『尋問』を録音するらしい。
しかし、俺はそこで疑問が生まれた。
普通録音する際にはテープレコーダーとかを使うのだが、この女性の周りにあるのは紙と羽ペンのみ。
しかし、このことに疑問を持っているのは俺だけのようで、少女は普通にしている。
困惑する俺を無視して女性は質問をする。
「まず第一の質問。君は何故校庭に倒れていたの？」
女性が喋ったとたん俺は自分の目を疑った。
何と、羽ペンと紙が宙に浮き、見たこともない字を書いているのだ。
これのどこが録音なのか少々どころか大いに理解できないぞこれ！
いや、それ以前に物理の法則とかいろいろ無視してるぞこれは。
しかし、そんな不可解なことを無視して（無視していないとやってられない）俺は質問の返答をする。

質問は大体１０分程で終わった。
おそらく少女も女性も俺の話を信じないだろう。
彼女たちはトラックや商店街という物を知らないような雰囲気を出していたからだ。
「私は学校にこの録音したものを持っていくわ」
そこで区切り、女性は俺の方を見つめながら言う。
「１時間後に学校に来なさい。そこで貴方の魔法の特性を調べるから」
女性はさらに俺の横にいる少女に「エリア。彼を案内してあげて」と言った。
どうやら俺の看病をしてくれた少女の名はエリアと名前のようだ。
しかし、俺は気になる。
魔法の特性を調べる？
そこで俺はエリアという少女に聞いてみることにした。
「あの、魔法の特性って？」
少女は答える。
「魔法の特性とは、その人がどんな魔法を得意なのかを調べるんです。ちなみに私は氷と水の特性を持っています」
俺は魔法という単語に対して不思議と違和感を感じなかった。
普通の人は魔法と聞いて馬鹿馬鹿しいとか、そんな非科学的なことなどと切り捨てるだろう。
でも、俺は違和感を感じるのではなく、寧ろ懐かしい響きを感じた。
俺はエリアに魔法について様々な質問をした。
どうやって使うのか、どんな魔法の種類があるのか、誰にでも使える物なのかどうか。
俺は知らないうちにこの世界は別の世界なんだと感じていたし、帰れないことも感じていた。
だからこそ俺はエリアに魔法のことを聞いていたんだと思う。
「あ、そろそろ学校に行きましょう」
どうやら学校に行って魔性の特性の検査をするらしい。

俺はエリアの後ろについて木製の家を出る。
いつの間にか俺は歩けるようになっていた。
なるほど、俺の回復力は本当に高いようだ。
「ここからは森の中を行くので離れないでください」
「了解」
そう言って俺はエリアの後に続いて歩き始めた。
俺がこの別世界に来たときに最初にいた場所に向かって。

爺さんの遺産

俺、柏木俊介(かしわぎしゅんすけ)はトラックに轢かれたら魔法の世界にいました。
現在、俺を看病してくれていたエアリスという名前の黒髪のショートで俺が最初にこの世界に来たときに倒れていた学校の制服であると思われるものを着ている。
俺はエアリスの姉と思われる教師に学校にくるよう言われたのでエアリスが道案内をしてくれている。
俺とエアリスは森の中の道を延々と進んでいる。
唯、俺はエアリスにこの世界の歴史を聞いていた。
エアリスが言うにはこの世界は５００年ほど前に大きな戦争が起きたらしいが、この世界を治めている【ディーオ国最連盟】（略してディオ連というらしい）と反乱分子であった【エスペーロ】との戦争が有ったらしい。
しかし、ディオ連側に緑の竜を操り、右腕に魔の紋章を持つ勇者が現れ戦争に勝利したらしい。
俺はこのことを聞いてやっぱりどの世界にも戦争は起こるんだなと思っていた。
２０分程歩いただろうか、何やら門らしきものが見えてきた。
「着きました。此処が魔法学園「ウィザード魔法学園」です」
そういってエアリスは門の前で立ち止まり、バスガイドのお姉さんのような笑顔で話す。
どうやらこの学校は俺の世界での中高一貫の学校のようだ。
大きさは・・・・・広すぎて見当がつかない。
俺とエアリスは門を潜(くぐ)り、学校の中に入る。
入って校舎へと続いてるのであろう道がある。
俺とエアリスはその道を進んでいく。
ある程度進んでいたら急に俺の頭に妙な痛みが走る。
「・・ッ！」

「大丈夫ですか？」
エアリスが心配そうに尋ねる。
何故だろう頭だけでなく右腕も痛み出してきた。
『聞こえますか？・・・私の声が、』
頭の中に女性の声が響く。これが俗に言うテレパシーってやつか？
頭が痛むんならあまり便利とはいえないな。
『聞こえているのでしたら返事をしてください！』
また声が聞こえる。声が聞こえるたびに頭と右腕の痛みが増す。
「もうやめてくれ！・・・お前の声は聞こえてるから話しかけないでくれッ！！」
俺は本気で叫んでいた。本気で叫ぶほどに頭痛が激しくなっているし腕の痛みも信じられないほどに痛い。
『よかった・・お願いです。今すぐ私の所に来てください！』
もう限界だ。俺は痛みのせいで、そのばにうずくまる。
『貴方が私の所に来れるように記憶に道を残します。・・・・なるべく早く私の居る遺跡まで来てください』
女性の声が聞こえなくなると同時に痛みが引いていった。
「大丈夫ですか？」
エアリスがまたも心配した声で尋ねる。
「ああ、大丈夫だ」
俺はよろよろと立ち上がり、エアリスに尋ねる。
「それよりも、この辺りに遺跡かそれっぽいものはないか？」
エアリスは暫く黙ると答えた。
「それならこの道を外れたところに戦争のときに勇者が最後に居たといわれる遺跡があります」
その言葉を聴いた瞬間俺の記憶にある道に関する記憶が出てくる。
「解った。ありがとう」
俺は一目散に走り出す。
まだ本調子ではないのだろう、すぐに息が上がってしまい走れなくなる。

それでも俺は遺跡に向かって走る。

5分ほど走ると遺跡らしきものが見えてきた。
「これだ、あの声が言ってた遺跡」
それは本当に遺跡だった。誰が見ても遺跡と答えるまでに遺跡の形をしていた。
俺は迷うことなく遺跡の階段を下りて、地下に向かう。
記憶にある道を進んでいく。
すると、広い場所に出た。
真ん中には祭壇の様な台がある。
その代の中央にカプセルのようなものがあり、中に女性らしきものが入っていた。
中に入っている女性のような物が入ってるカプセルの下には何かの文字が書いてある。
俺はカプセルに近寄り、埃を被った文字を見つめる。
「・・・これ、・・・・日本語だ」
そう、文字は日本語でこう書かれていた。
『この世界に来るであろう子孫達へ。
まず、この世界に君が来たのは偶然だがそれはやるべき事が有るからだ。
私の場合は戦争を終わらせること。
君の場合はどうかは解らないがこれだけは言える。
この世界の厄災を止めなければ君は帰ることはできない。
私は役目を終えたので元の世界に返り、残りの人生を過ごす。
この世界に来た君が困らないように私はあるものを君に贈る。
それは私の全魔力で作り上げた使い魔と魔力と特性を飛躍的に上昇される魔道書だ。
この魔道書のおかげで私は厄災を止め、帰ることができた。
魔道書の名は『オシリス』使い魔の名は君が決めてくれ。

魔道書は右腕で持てば右腕に宿り君を助けてくれるだろう。
使い魔も私の全魔力で作ったものだから心配は要らない。
君に一つだけ頼みがある。
どうか、この世界を守って欲しい。
この世界はとても素晴らしい。
君もこの世界の素晴らしさが解る筈だ。
最後にもう一つだけ。
君に出来ない事は無いと信じなさい。
そうすれば不可能も可能になる筈だから。
以上、柏木順平（かしわぎじゅんぺい）より。』
柏木順平。俺の祖父であり「魔法の世界」に行ったことのある人。
俺はカプセルに目を移す。
確かにカプセルには本と使い魔らしき女性が居る。
「解ったぜ、爺さん。」
俺は拳でカプセルを叩き割る。
拳は血で染まったが気にしない。
「この世界の厄災を俺が止めて、元の世界に返ってやるさ！！」
こうして俺の異世界でやる事が決まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8518z/

【別世界】アナザーワールド

2011年12月27日23時50分発行